

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2025

先達に聞く 2025

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

2025年11月14日(金)
エル・パーク仙台 市民活動スペース

「先達に聞く」は、仙台で長年活動してきた女性たちに「次世代に伝えたい思い」をお話いただく企画です。2016年に「エル・パーク仙台 30周年企画」として初めて実施し、今回で9回目になります。

それぞれの団体の活動については、催し物やさまざまな媒体を通して知ることができますが、一人ひとりの女性たちがどのような思いで、何をめざして活動を続けてこられたのか、その思いに触れる機会は多くありません。男性主導の社会が、女性たちの声に耳を傾けてこなかったという現実もあります。

エル・パーク仙台は「市民活動をする場がほしい」という女性たちの声を受けて、全国に先駆けて開館した男女共同参画センターです。女性たちの経験や思いを継承するために、次世代へのメッセージを伝えていただく場をつくり、今回を含め43名の先達にお話いただきました。平和、子育て、食、健康、労働、まちづくり——。あらゆる分野での女性たちの草の根の活動が、今の仙台につながっていることを実感しています。

この記録を通して、一人ひとりの思いを受け取っていただければ幸いです。

※記録は、ご本人の発言をもとにまとめたものです。
※仙台市男女共同参画推進センターのホームページで、
この冊子のPDFファイルをダウンロードできます。
<https://sendai-l.jp/shiraberu/publications/>

目次

「資格を社会に還元する」 大河内 裕子 仙台市地域活動栄養士会	P.1
「こどもの幸せを育む」 貝塚 順子 宮城子どもを守る会 代表	P.2
「性の健康と男女平等」 村口 喜代 リプロダクティブ・ヘルス/ライツネットワークみやぎ 顧問	P.3
「本の世界を伝え続けて」 高梨 富佐 子ども読書コミュニティプロジェクトみやぎ 会長	P.4
受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ	P.5

「資格を社会に還元する」

大河内 裕子 (おおこうち・ひろこ) さん

仙台市地域活動栄養士会

25歳から仙台市の訪問栄養相談員4年。子育てのため休止。

「三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」と孔子は言うが40歳にして起業。フリー・個人事業主として栄養士稼業再開。仙台市訪問栄養相談員として妊婦・離乳食指導、寝たきり訪問など、保健所の依頼で訪問開始。

パソコンが普及した1990年代、栄養計算などのシステムを開発し、仙台市の保育所に給食管理システムを納入。種々の健康教室や特定保健指導に従事。専門学校講師など歴任。

77歳にして個人事業主の看板を外す。

現在、仙台市地域活動栄養士会「Life(旧楽生き)グループ」として高齢者に限らず単身者、二人暮らしなど少人数の世帯の生きやすさの研究をしていこうと考えている。



栄養士への入口

私は生まれも育ちも仙台で、宮城学院女子短期大学を卒業しました。1970年代は学園闘争の最中。行きたかった大学は親に反対され「どこでもいいや、地元だし調理実習もあるし美味しいものが食べられそう」と家政科に入学しました。当時の流行語だった「でもしか先生(先生にでもなろうか、先生にしかなれない)の略」という言葉に、気持ちが揺れながら栄養士の資格と教員免許を取りましたが、その頃は、栄養士を仕事にしたいとは思っていませんでした。

学びと経験が結びつく

卒業時、たまたま大学の副手の席が空き、大学に残りました。夏休みは全然ないし、先生が休む時も休めず、給与は非課税レベルでしたが、大変面白く過ごしました。結婚と出産を機に3年で仕事を辞め、子育てに専念します。ところが、家にいると何か物足りないんですよ。何かしたくて自分にできることを考えた時「資格を生かそう!」と思いました。

たまたまその頃、日本栄養士会が実施した栄養士有資格者の掘り起し事業があって、みっちり講義を受けました。先生も内容も、短大の時とほとんど同じでしたが、学生時代には頭からスーッと抜けていった知識が、何年かの実生活の経験と結びついて、「そうか!なるほど」と頭に沁みこんでいくようでした。栄養士の仕事って面白いかもしれないと思ったのはその時です。

職業人としての自覚と挑戦

第二次ベビーブームの頃、仙台市の訪問栄養相談員として妊婦さんを訪問し、離乳食の指導などをしました。1日8軒も訪問すると、最後は口が回らなくなり、相手が誰だかわからなくなるほど。そのうち、次々と子どもが生まれたこともあり4年くらいで辞めました。

1970年代は、食の安全や公害が相次ぎました。昨日まで食べていたお豆腐や漬物が、今日は発がん性があ

るからダメと言われるような大変な時代。カネミ油症事件、オイルショック、こどものアレルギー増加、スパイク粉塵の問題も出てきました。

何とかしなければいけない、何ができるのかと悶々としていた時に、ふと卒業時に教授から言われた言葉を思い出しました。「資格は一生ものだが、使わなければ生かされない」「さまざまな支援があったお陰で得られた資格なのだから、世の中に還元しなさい」。この言葉がずっと胸に残っていて、やはり私にできることはこれしかないと思いました。

子育て中も、「在宅栄養士の会(現在の仙台市地域活動栄養士会)」で学び続け、知識のアップデートを欠かさないようにしていました。44歳で管理栄養士の国家試験に合格。フリーで働く場合、報酬に反映されるのは表に見える仕事時間のみですが、調理実習の準備や試作のような裏で費やす時間は数倍になります。その時間も実務経験として評価されるようにしたいと考えました。職業人としての意識を変えなければと思い、自分でやろうと個人事業主として管理栄養士事務所を開業しました。

食で支え続ける

インターネットが世の中に出始めた頃、栄養計算ソフトや保育所向けの給食管理システムを開発しネットで発信したことで全国の栄養士、保育所や個人とネットでつながることができました。仕事の幅を広げることで異業種の方とも知り合え、栄養士という職業の認知拡大に貢献できたかなと思います。また、全国の後輩たちに管理栄養士事務所を開業する人が増えていくのを見て、自分の思いを広められた気がしています。

77歳となり個人事業主の看板は下ろしましたが、私の関心は今も食にあります。一人暮らしや二人暮らしにおける食を、どう支えるか。専門職の言葉を、誰にでもわかりやすく伝えるにはどうしたらいいか。看取りの場における私たち栄養士の仕事とはなんだろうか、そんなことを仲間と話し合っているところです。

「こどもの幸せを育む」

貝塚 順子 (かいつか・ゆきこ) さん

宮城子どもを守る会 代表

1949年 角田市生まれ。こどもは3男1女
 1970年 宮城県立保育専門学院 卒業、養護施設（仙台基督教教育院）勤務（～1981年）
 1985年 宮城子どもを守る会 入会、新日本婦人の会、生協などの市民活動
 1989年 夫の転職により弁当製造業を立ち上げる
 2001年 母子生活支援施設勤務（～2011年）
 2013年 ファミリーホームパート勤務（～2024年）
 2024年～ 宮城子どもを守る会 代表



民主的な養護施設で

私は宮城県角田市に生まれました。1970年に宮城県立保育専門学院を卒業後、実習先だった仙台基督教教育院に就職しました。やんちゃなこどもたちが愛おしく共に生活したいと思ったからです。

当時は20歳で、小1から中3までの16人の女の子を受け持ちました。今思えばよくやったと思います。どうしてやれたかというと、育児院自体がとても民主的だったんです。一人ひとりのこどもについて職員みんなで話し合い、チームで支え合う体制ができていてみんな仕事に燃えていました。

仕事と家庭の両立

当時育児院は荒れていて、いじめや家出をする子どもが目撃できない状況でした。次第に生活環境が改善され、食堂で大勢で食べていたご飯も家庭のように各部屋で作れるようになり、こどもたちの生活も落ち着いていきました。

仕事の中心はこどもたちの生活支援です。朝6時に出勤してこどもを起こし、食事、登校支援、掃除洗濯、打ち合わせをして一旦休憩。下校時間の午後3時頃からこどもが寝るまで再び働くという断続勤務で、宿直も週1回ありました。仕事が好きで、結婚後も産前産後休暇以外は仕事を続けました。この時代、共働きはまだ少なかったのですが、結婚後も仕事を続ける仲間が増えてきたので、組合で交渉して朝7時から夜8時までの職場保育所を作ることができました。ある時、背広姿の夫が赤ちゃんをおんぶして、おむつなどの荷物を手に提げて保育所に来ました。それを見た女の子たちが「なんで旦那さんにあんなことさせるんだ」と言ったんです。すでにジェンダーの刷り込みがあるんですね。今はパパが抱っこやおんぶをしている光景もよく見られるようになり、とてもいいことだと思います。

2人目が生まれると、さすがに無理が生じて11年務めた職場を辞めることになりました。

宮城子どもを守る会との出会い

主婦になったのですが、物足りなくて物足りなくて。そんな時に宮城子どもを守る会に出会いました。学習会などを行っている団体で全国にあり、こどもの権利やこどもから学ぶことを大事にしている魅力的な人たちでした。子育てをしながら、PTA、生協、こども会で活動しました。こどもたちとの旅行を近所仲間と企画したり、家庭保育を頼まれたりして、楽しい時間でした。

ところが、夫が大手の建設会社から脱サラし、先輩と事業を始めます。暮らしに困ってしまい、働く必要が出てきました。空き店舗を見つけて、ひらめいたのが弁当屋の開業でした。口コミで評判が広がり、忙しく働きました。4人の子育てと両立しながら10年続け、気づけば50歳になっていました。それでも心のどこかでこどもに関わる仕事をしたいなと思っていました。

そんな時、育児院時代の元同僚が母子生活支援施設の所長になっていて、来てみないかと声をかけられました。DV被害者の支援です。安心できる環境づくりを心がけながら10年働き、定年を迎えました。

その後、自分へのご褒美にピースボートに乗りました。東日本大震災後は石巻でファミリーホームを立ち上げた住職さんのところで週3日、泊まりのお手伝いをしました。田舎の小規模な施設でこどもたちはのびのび過ごしていました。75歳まで10年勤めました。

これからも仲間とともに

振り返れば10年ごとにいろいろなことをやってきて、いつもこどもたちに励まされ、仲間にも恵まれました。今、卒業生や昔の同僚と会うのがとても楽しみです。

昨年、宮城子どもを守る会の代表が亡くなり、代表を引き受けることになりました。今回の男女共同参画推進せんだいフォーラムでは、仲間と沖縄戦の映画上映会に初挑戦します。あと何年できるかわかりませんが、こどもたちと平和の事を考えながら子どもを守る会という市民活動を続けていきたいと思っています。

「性の健康と男女平等」

村口 喜代 (むらぐち・きよ) さん

リプロダクティブ・ヘルス/ライツネットワークみやぎ 顧問

1980年9月～1999年3月 仙台市立病院産婦人科 医長
 1986年～2013年 宮城教育大学非常勤講師「人間と性」の講義を担当
 1999年6月～2025年6月 村口きよ女性クリニック 院長
 2001年～2011年 財団法人せんだい男女共同参画財団 理事
 2002年～2022年 日本性科学会 理事
 2003年～2019年 NPO 法人イコールネット仙台 理事
 2004年～2006年 尚絅学院大学非常勤講師「両性論」の講義を担当
 2009年6月～2024年3月 リプロダクティブ・ヘルス/ライツネットワークみやぎ 代表



活動のきっかけ

仙台市立病院の勤務医として勤めていた1994年、国連人口・開発会議（開催地：カイロ）で「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康と権利）」が世界的に承認されました。翌年、国連世界女性会議（開催地：北京）でも再確認され、「私のカラダは私のもの、カラダと性に関することは私が決める」という権利を獲得したような思いで、当時の女性たちは大変盛り上がりました。

その4年後、産婦人科の大先輩である長池博子先生が「リプロダクティブ・ヘルス/ライツネットワークみやぎ（以下、団体）」を立ち上げられ、私に副代表の声がかかりました。その時からずっと、この活動を続けています。

未成熟から成熟へ

40代の頃、勤務する病院では男性医師の中に女性医師が私一人だけでした。自然と女性の患者さんたちからいろいろな話をされる立場になり、性に関する悩みや嘆き、悲痛を数多く聞きました。自分自身の問題としても悶々としていた時期でもあり、雑誌では「貧しき性生活の諸相」という言葉も目にする時代でした。

その頃、ある性教育研究家のお話を聞きました。「限りなく未成熟な」日本人男女という言葉聞き、私は感激したのです。そこまで言ってもいいのだ、限りなく未成熟だけれど追究していけば成熟へ向かう過程を見られるかもしれない、と希望を感じ、トンネルを抜けたような気持ちになったことを覚えています。性をより専門的に学びたいと考え、日本性科学会に入会し、知識を積み重ねてきました。

SRHR と性の健康

2002年にはWHOが「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（SRHR）」を提唱し、性は個人の人権の中でも最後に残された重要な人権だと位置づけ

ました。さらに2006年、世界性科学会では、SRHRは「性の健康」という大きな課題の一つとして実現させていくべきものと宣言されました。それを仙台で普及させるために団体の「しおり」を作り直しました。

性の健康のポイントは、一つ目に人権、二つ目に男女平等、三つ目にセクシュアル・プレジャー（性の喜び）があるということです。ジェンダーギャップ指数が118位の日本では多難な道が続くと思いますが、だからこそ啓発が必要だと感じています。

社会の変化と次世代への希望

団体設立10周年記念にアンケート調査を実施し、「みやぎの女性 からだと性のホンネ！」という冊子を作りました。性の健康を守るための一丁目一番地は、「私たち一人ひとりが自分自身に向き合うこと」。そうでなければ世の中は変わらないと思い立ったからです。男性版の要望もあり翌年実施しました。

時代が急速に変化し、若い人も含めて性行動の消極化が目立ってきたタイミングで、もう一度調査しました。すると、かつて男女差が明らかだった相手への愛情表現に差がなくなり、二人の関係はうまくいっていると答えた人が非常に多かった。優先順位が変わっただけで、人と人との関係性そのものは後退していないとわかりました。これは大きな成果でした。

女子大学生が主体となった「月経」冊子作りにも関わりました。団体は支援・指導する立場で、何回も話し合いを重ねました。ミニイベントで成果を紹介した時には、堂々と発表する彼女たちの姿に、深く感動しました。

現在進行中の男子大学生による性教育を考えるプロジェクトは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツが女性だけの問題ではなく、男性も含めた社会全体の課題であることを示しています。

「ジェンダー」というのはなかなか手ごわいものですが、世の中を変えていくために非常に重要なことでもあります。活動には困難も伴いますが、その中で成長できると考えています。

「本の世界を伝え続けて」

高梨 富佐 (たかなし・ふさ) さん

子ども読書コミュニティプロジェクトみやぎ 会長

1990年 小牛田図書館 (現 美里町小牛田図書館) 司書
 2006年 美里町南郷図書館 司書
 2010年 東北福祉大学 兼任講師 (図書館司書課程)
 2011年 東北福祉大学教育学部 専任講師
 2012年 県内で子どもと本を結ぶ活動を続けてきた人を中心に『子ども読書コミュニティプロジェクトみやぎ』結成。会長を務める。スキルアップを目標にして講演会、学習会等を開催。
 2018年 東北福祉大学 退職



「本が好きの人」

私は宮城県の旧小牛田町、現在の美里町で生まれ育ちました。小さな書店はありましたが図書館はなく、街なかでは本なんて見かけないようなところでした。本好きの祖父が東京へ行くたびに私のために買って来てくれたので、それを読んで暮らしていました。

進学先の古川に書店は3つほど。高校の学校図書館は十分ではなかったけれど、そこそこ利用していました。私は自分自身を「本が好きの人」だと思っていましたし、周囲もそう見ていたと思います。

世界の広さを知った衝撃

大学進学で東京に出たとき、初めて本の世界の広さを知りました。私鉄の駅前の書店ですら古川のものより大きく、新宿の紀伊國屋書店を訪れた時には、世の中とはこういうものだったのかと驚いてしまいました。

もしも、こどもの頃や、もっと勉強したいと思っていた時にこんなに本があったなら、どんなに良かっただろうと思いました。同時に、自分は井の中の蛙だったものすごくショックを受けました。こんなに沢山の本が世の中にあることを知らずに過ごした18年間をどうしてくれるんだ、という思いでした。

図書館をつくりたい

結婚後、仕事を辞めて夫の仕事の関係で静岡へ移りましたが、仕事をしたくなり図書館のお手伝いや読み聞かせを始めました。そこで初めて「お話し会」に出会い、こどもの本について学び始めました。勉強会や行事で会うようになった人は「静岡は東京より10年も20年も遅れている。こんな状態じゃだめだ。もっと頑張らなくちゃ」と言っていました。

その後、福島を経て宮城に戻ると、私は愕然としました。学校図書館や地域の図書館は、私が小学生の時とほとんど変わっていませんでした。仙台市も仙台市民図書館と榴岡図書館しかありませんでした。

1970～80年代は日本の図書館の変革期で、爆発的に公立の図書館ができたり、移動図書館が走ったりして活動も盛んでした。それなのに宮城は20年も30年も遅れている！田舎に行くときより顕著で、1990年代まで農家の女性が本を読むことは「怠けている」と思われていました。一番問題なのは、そこに住んでいる多くの人がその遅れに気づいていないこと。子どもたちはというとテレビゲームばかりしていて、これはダメだ、何とかしなければ、図書館をつくらなければと強く思いました。

そんな思いから司書資格を取得し、幸運にも小牛田の図書館に就職できました。当時は、図書館をつくることに市民がすごく反対していて、議会を通すのが大変でした。図書館をつくるには子どもたちから始めるしかないと思い、子どもたちに「本を読む」ことを伝え、読み聞かせなどのサービスを通して各家庭へと本の世界を伝えていきました。

読む力は生きる力

1990年代以降にこどもの読書が注目されるようになると、よく言われたのが「読む力は生きる力になる」ということ。結局、読む力がなければ、いつまでも情報難民なのです。哲学者の鶴見俊輔さんが「文化はまき散らされて初めて文化になる」と仰ったように、読書もまた、限られた人のものではなく社会全体に広がってこそ意味を持ちます。インターネットの時代になり「紙の本はもういらぬ」と言われることもありますが、紙であってもデジタルであっても、読む力をつけて内容が把握できるようにならなければ、情報は得られません。

そのためには、やはり子どもに本を読んであげて、肉声で物語を届けるということを一生涯やるのが大切だと思っています。子どもに本を読んであげると、言葉の一つひとつにいろいろな反応を示します。私が面白いと思っていなかったところに反応するのは、「こどもに本を」と大勢の人に伝えていくことが、今の私の課題です。

受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ

聞き手のみなさんからのメッセージを一部紹介します。

[大河内 裕子さんへ]

- ・ “学んだこと” を世の中に還元する、まさに大河内さんの人生がそのまま表現されたお言葉ですね。
- ・ 「必要なものは自分で立ち上げる！」というエピソードが、とてもかっこ良いです。常に先を、前を向いていらっしゃるお姿に、パワーをいただきました。
- ・ 専門性を継続して深めていかれた過程が素晴らしい。“職業人としての意識” が印象的でした。
- ・ ずっとご自身でできることを考え、続けられたことに感動しました。自営のパイオニアですね！ここからのご活躍も期待しています。

[貝塚 順子さんへ]

- ・ どの時代のことも「楽しかった」といえる貝塚さん、すてきです。
- ・ ご自身のやりたい気持ちにまっすぐに、未知の世界にも飛び込んでいき、そこでまた新たな世界を広げていく。バイタリティあるお姿に勇気をいただきました。
- ・ なかなか続けたいことに巡り合うのは難しいと思うので、結婚しても「この仕事が好き。続けたい」と思えるのはいいなと思いました。
- ・ こどものジェンダーに気づく感度はすごいですね。こどもたちにも平和の大切さ、伝えていきたいと思いました。

[村口 喜代さんへ]

- ・ 1丁目1番地はわたしであり、あなたである！という言葉のプレゼントありがとうございました。自分事として考えて行動していきます。
- ・ 女性のみならず男性にもアンケートを取るということは、実はすごいことだなと思いました。
- ・ 自分の気持ちを大切にして、伝え合える・理解し合えるように、自分から発信していきたいと思いました。
- ・ 性の健康が基本であり、人権・ジェンダーの課題に向き合っていくこと。わたしたちが引き継いでいくことだと思いました。

[高梨 富佐さんへ]

- ・ とてもパワフルで面白いお話でした。いろいろなご苦労もあったかと思いますが、好きなことを続けることはパワーになるんだなと改めて感じました。
- ・ いろんなきっかけをエネルギーに変え、生き生きと活動されてきたお姿に私もワクワクしました。
- ・ 今、わたしが好きな本を存分に読めているのは、高梨さんたちの活動があるからだ！と気づかされました。「こどもの反応」を味わってみたいです。
- ・ さすが高梨さんです！力強いお言葉ありがとうございました。こどもから始めるしかない。本当です。



男女共同参画推進せんだいフォーラム 2025
「先達に聞く 2025」

2026年3月発行
公益財団法人せんだい男女共同参画財団

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町 4-11-1
141ビル（仙台三越定禅寺通り館）5・6階
TEL. 022-268-8300
FAX. 022-268-8304